

週日の説教

金 大烈 神父 2008年7月8日(火)

《神様の働き手となりましょう》

旧約の聖書でイスラエル人が犯した一番大きい罪は何でしょうか？ 創世記から最後までこの罪はずっと続けられます。それは偶像崇拜です。今日のホセアの預言書 11 節でも、偶像崇拜をするイスラエス人について訴えています。

では、今のこの時代の偶像には何があるのでしょうか？ 人によっては、お金や名誉や容姿等。整形手術を受けて形をよくしようとして、鼻を整形したら目が気になり、さらに目をなおしたらあごが気に入らない。このようになる若者がけっこういます。偶像は、人によってみんな違い、いろいろなものがあると思います。

今日もう一度、自分にとって神様を越える偶像となっているものは何であるか、それが本当に神様よりはるかに勝るものなのか考えてみましょう。神様にいただいたこの命より勝るものは何なのでしょう。自分が意識しないまま、ただ好きなだけでついていったものが本当に私たちが求めなくてはいけないことに邪魔になっているのではないかを考えてみたいと思います。

次に、今日の福音(マタイ 9・32-38)には、何のメッセージがあるのでしょうか？ 最後にイエスさまが、「働き手が足りないの、収穫の主である神様に働き手を送ってくださるように祈りなさい」と言っています。それはどういう意味でしょう？ 働き手とは、狭い意味では司祭とか修道者になるかもしれませんが。しかしこれは私たち全員に言っていることですよね。働き手とは、神様の存在、神様の能力、神様の愛、御心について述べ伝える人達のことです。そして、その述べ伝える働き手が少ない、足りない。

結局、私たちも働き手です。みなさまも私も。では、その働き手になるための条件として、何が一番必要なのでしょう？ 普通の人とは違う何かが必要ではないか。それは、何でしょうか？ やはり喜びでしょう。知らない人から見て、あの人には何か嬉しく見えるものがある、ということでしょう。私たちの日々の生活の中に喜びが見えなければ、私たちは自分の信仰について反省すべきではないかと思えます。司祭も必ず信者の前で、そして信者でない人の前でも笑顔を見せます。それは、わざわざ作るのではなく、イエス様のみ言葉によって、イエス様のくださった恵みによって、自然に出される喜びにならなければいけないと思えます。信者の人たちも全く同じだと思います。たぶんみなさまの隣の人々は信者ではないと思えます。その人たちと少なくとも一日1回くらいは顔をあわせるでしょう。その時、習慣になっている建て前の顔ではなく、「何をしても何を聞かれても何を言われても、あの人の中には何か喜びの輝きがある」、そういう気持ちを起こさせるのが、働き手の役割ではないでしょうか。そのために何よりも私たちが考えるべきことは、「信仰の生活をしながら、本当に喜びを感じながら、自分に与えられた全ての一日を生きているか」です。他の人達より、苦しみの顔ばかりしていたら私たちは働き手にはなれません。

私たちはミサでご聖体をいただきます。笑顔で、喜びの顔を述べ伝えましょう。信者でありながらいつも暗い顔をしている人達に自然に喜びを映しましょう。そして、苦しくて疲れるはずなのになぜいつもニコニコしているのかと聞かれるような福音的な生活をしましょう。

今日のミサでもご聖体をいただきます。ご聖体は毎日ただ食べてしまうごはんのようなものでは絶対ありません。これは私たちの生きる力です。この力の意味を私たちが感じる事ができれば、作られた喜びではなく、自然に生じる喜びを得ることができると思えます。それを求めることが信仰ではないかと思えました。

ありがとうございました。